

# 英 語

乗 富 智 子

## 1 英語における「よりよい未来を志向する子」

ICT の発達や SNS の普及により、日本にいながら世界各国の文化に触れることが容易となった。また、金沢にも多くの外国人観光客が訪れるようになり、子どもが外国語に触れる機会も多い。このような社会の中で英語を学ぶことは、自分とは異なる文化や価値観に触れることであり、自分と他者を結び付けるきっかけとなる。多様な文化や他者に触れ、それを理解しようとする、そして相手にも自分を理解してもらおうと働きかけることが、「よりよい未来を志向する」ことにつながる。英語は他者とコミュニケーションを図る力を育む学習である。他者とコミュニケーションを図るためには、自分のことを伝える (Production) だけではなく、お互いが相手のことを理解しようとする (Reception) ことが不可欠である。「よりよい未来を志向する」ためには、この相互理解をめざしたコミュニケーションをくり返し経験していくことが重要であり、英語がその役割を果たしていくことになる。

新学習指導要領では、3・4年生で新たに「外国語活動」が、5・6年生で「外国語科」が導入されることとなり、小学校高学年で教科として英語が学習されることとなった。外国語科の学習では、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する」ことが目標とされている。語彙や文法などの知識を個別に身に付けるのではなく、実際のコミュニケーションの中で必要な知識を身に付け、活用し、思考・判断・表現することが求められている。

本校の英語では、英語表現だけでなく、コミュニケーションの内容を重視する。それによって、子どもが目的意識・相手意識をもち「知りたい」という思いをもって聞いたり「伝えたい」という思いをもって話したりできるようにする。聞いて理解することはコミュニケーションの大切な要素であり、聞くことは英語を身に付ける上で不可欠である。教師や友達とやりとりをする中で、たくさんの英語表現を聞いて理解することで子どもが必要な英語表現に気づき、学びながら「わかった」「伝わった」と感じることで授業をめざす。

以上のことから、英語における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・目的意識・相手意識をもって コミュニケーションを図ろうとする子
- ・教師や友達とのやりとりを通して 伝えたい内容を形成 再構築し 適切な表現を選択・活用できる子
- ・コミュニケーションの経験を生かし 他者や異文化を理解しようとしたり 自分を理解してもらおうと働きかけたりする子

## 2 英語における未来へ生かす決める授業デザイン

英語の授業で最も大切にしていることは、単元の学習を通して子どもにどのような姿になってほしいのかを具体的に考えることである。教師が思い描く子どもの姿や学習のねらいに応じてゴールを設定し、子どもが目的意識・相手意識をもって学習に取り組むことができるようにする。見通しをもってゴールに到達するために、学習計画を子どもとともに決める。

英語では、自分が相手に伝えたいこと (内容) をもち、それにふさわしい表現 (言葉) を選び、それらを目的に応じてどのように伝えるのか (方略) を考え、表出するというプロセスを経験しながら学習する。教師や友達とのやりとりを通して、子どもが自分の伝えたい内容を深く考えたり、必要な表現に気付いたりし、適切な表現を選択する (決める) ことができるようにする。

子どもはコミュニケーションを図ることで自分のことを伝えると同時に相手の意図や気持ちなどを理解する。このような英語でのコミュニケーションの経験をくり返すことにより、他者との豊かな人間関係を築くことができるようになる。子どもが自分の学びを未来に生かすためには、コミュニケーションの経験を通して学んだことや自分が身に付けた力を認識することが

必要である。そこで毎時間の授業、単元の終末に、それぞれふりかえり・省察の時間を位置付ける。

### 3 決める授業の手だて

#### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

子どもが目的意識をもって学ぶためには、子どもの興味・関心を高め、英語でコミュニケーションを図る必要感がある場面や状況を設定することが重要である。子どもにとって必要感のある場面や状況を設定することで、子どもが生活経験、知識、既習表現などを活用し、理解したり表現したりすることができるようにする。

そのために、学習の到達目標となるゴールを設定し、そのゴールに向かってどのような学習をしていくとよいのか、見通しをもたせる。ゴールは子どもの「知りたい」「伝えたい」という思いをもとに設定し、相手意識をもって自己表現できるものとする。ゴールに到達するために、何をしなければならないか、どのような学習が必要かを子どもとともに考え、計画を決めていくことで、子どもが一つ一つの学習に目的意識をもって取り組むことができるようにする。

#### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

コミュニケーションをとるときには、必ず相手が存在する。そして自分が相手に伝えたいこと（内容）がある。相手に内容を理解してもらうためには、どのような言葉を用いるとよいのか、どのように表現するのかといった言葉や方略を工夫しなければならない。

そのために、まずは相手に伝えたいことをはっきりさせ、内容を考える時間を設定する。その際、相手は何を知りたいか、相手はどう考えるかなど、相手意識を明確にもたせることが重要である。さらに、教師や友達とのやりとりを通して、考える視点を広げる。教師が新たな情報を聞かせたり、友達と考えを共有したりすることで、伝えたい内容をもう一度深く考えることができるようにする。

また、自分の伝えたい内容に適した表現を決めるために、たくさんの英語表現に触れさせる。英語は外国語の学習であることから、子どもの語彙には限りがある。子どもが適切な表現を選択・活用していくためには、多様な英語表現に触れていかなければならない。子どもが知りたいと感じたときに教師がモデルを見せ、必要な表現に気付くことができるようにする。また、毎時間の授業で Teacher talk を行い、単元で扱う英語表現に関連のある単語や文構造を示す。クイズを出して復習をしたり、メディアに取り上げられている時事を簡単な英語で聞かせたり、季節や行事に合わせた話を聞かせたりなど、単元のゴールに直結しないような表現であっても、意味のある文脈の中で触れることができるようにする。

#### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

毎時間の授業で、自分の学びや他者からの学びをふり返り、ワークシートに記入する時間を設定する。ワークシートには、ねらいに達することができたかを自己評価する部分と、自由記述の部分設ける。自由記述では、できたことやわかったこと、友達や教師の話聞いて考えたこと、これからやってみみたいことなどを書く。伝えたい内容を深く考えたことや、伝えるために必要な表現を知ったこと、相手についてよりくわしく理解したことなど、授業の中での学びを自ら認識できるようにする。

各単元や各学期の終末にはこれまでの自分の学びをふり返る、省察の機会を設ける。学習全体をふり返るワークシートを用意し、ゴールに到達することはできたか、見通しをもって学習することができたかを問う。また、単元でどのような力を身に付けたのかを問うことで、自分を客観的にとらえることができるようにする。子どもは単元や学期のはじめにはできなかったことができるようになっていくことを実感し、自分の学びに満足感や達成感を味わうことができるであろう。加えて、単元で身に付けた力が今後の生活においてどのような場面で生かすことができるのかを問うことで、学習したことを活用できる実際のコミュニケーションの場面を考えられるようにする。

## 4 実践例

未来へ生かす決めるを促す授業デザイン～ふりかえり・省察から見えてきたこと～

### ①5年「What do you have on Monday?」の実践

本単元は学校生活をトピックとし、教科や職業の言い方に慣れ親しみ、自分の夢の時間割を伝え合う学習である。夢の時間割とは、自分の将来の夢を考え、その夢に近づくために自分に必要な教科を考えて作る時間割である。本単元の学習を通して、今の自分の学びが未来の自分につながっていることを感じてほしいと願い、本単元のゴールを「未来の『なりたい自分』に近づくための夢の時間割をつくろう」と設定した。単元のはじめにゴールを提示し、学習計画を立て、子どもが見通しをもって学習に取り組むことができるようにした。また、自分の夢の時間割を考える前に複数の教師の夢の時間割を聞かせ、具体的にゴールのイメージをもつことができるようにした。また、様々な職業の言い方に慣れ親しませるとともに、子どもと年齢の近い若者たちが真剣に将来のことを考えていることを理解させるため、授業の始めに Teacher talk として若者たちのもつ夢を英語で継続的に聞かせた。

本単元では、毎時間の授業でふりかえりを行った。ふりかえりには、本時のねらいに達することができたかを問う部分と、L（わかったこと、できたこと）、F（友達や教師の話聞いて考えたこと）、T（これからやってみよう）を記述する部分を設けた。また単元末には省察として、単元全体をふり返った。ワークシートを用意し、ゴールに到達することはできたか、見通しをもって学習することができたかを問い、さらに単元で身に付けた力は何か、身に付けた力は今後どのような場面で役に立つか、単元全体をふり返って、深く考えたことや気付いたことを記述するようにした。

1時間目、学習計画を立てたとき、導入として三人の教師の子どもの頃の夢を英語で聞かせた。宇宙飛行士やコック、野球選手など様々な夢について語られた後、「みんなの夢は何だろう。」と子どもに問いかけた。この授業のふりかえりで、Tに着目してみると、多くの子どもが「オリジナル時間割を考えたい」「だれも思いつかないような時間割を作りたい」「自分の夢は何が必要か考えたい」など、時間割作りに意識が向いていることがわかる。それぞれ、自分の中に思い描く夢があり、それに向けたオリジナル時間割作りへの思いが書かれている中で、A児は「あまり『〇〇になりたい』(という思い)がないので、その夢を見つけたいと思いました」と書いていた。学習計画には、3時間目に「なりたい自分を考えて、時間割を作る」という時間が設定されていた。A児は「なりたくないものがない」という今の自分をふり

(夢の時間割)

This is my dream schedule.

I have math, social studies, Japanese, English, English, and Australia.

(夢の時間割の理由)

I want to go to Australia.

I want to live there in the future.

In Australia, many people study Japanese.

I want to teach Japanese to Australian children.

I have to learn about Australia. I want to know the people's lives.

資料1 教師の考えた夢の時間割

返りながら、時間割作りの前提となる「自分の夢」を見つけたい、という今後の学習に対する意欲を示していた。2時間目、教師の夢の時間割を聞く授業で、様々な教師の夢やそれに合わせた時間割を英語で聞かせた(資料1)。ここで、I want to be ~.を使って具体的な職業の名前を挙げる表現のほかに、I want to ~.を使って、やりたいことを将来の夢として言う表現も聞かせた。1時間目のふりかえりに見られた「夢を見つけたい」という思いをふまえ、A児が自分の夢につながられるように、自分のやりたいことを将来の夢としてもよいという例を示すことにした。この授業のA児のふりかえりを見てみると、F(教師の話聞いて)には「私はまだなりたくない職業が決まっていないけど、乗富先生みたいに『行きたい』という夢でもいいな…と思いました」という記述が見られた。また、Tには「私はもっと好きなことも嫌いなことも入っている時間割にしたいと思いました」と書いていた。これらのふりかえりから、1時間目と2時間目のA児の意識の違いが見取れる。1

時間目にはなりたい職業が見つけれず、不安に思っていたA児だが、2時間目の教師の話を書くことで、自分の将来の夢を少しずつ思い描くことができるようになった。最終的にA児が考えた将来の夢はI want to study tomatoes.である。自分の夢を実現するために必要な学習について考え、時間割に表すことができた。

省察のワークシートには、「『夢の時間割』を考え、伝えることができましたか」という問いに対して、A児はYESと答え、自分の学びを以下のように振り返っていた（資料2）。

<この単元で身に付けた力について>

「こんなことしたいな…」というものの具体的な内容を考え、さらには、その英単語に興味をもつことができました。

<身につけた力は今後どのような場面で役に立つか>

私、最初は今で十分だから、特に何もなりたいものやしたいことなんてないと思ってたんです。でも、よく考えたらありました。そして、それをするためにすべきことも考えることができました。きっとこれは、「もう何もない…」って絶望しているようなときにも役立つと思います。

#### 資料2 A児の省察のワークシート

A児の省察から、夢の時間割を作ることで、A児は教科や時間割の言い方などの英語の表現を学んだことに加え、自分の夢は何なのか、深く考えることができたのだとわかる。はじめは「夢が見つけれない」と思っていたA児が自分のやりたいことを考え、見つけ、英語で表現することができた。学習の見通しをもたせたり、教師の話す英語を聞かせて視点を広げたりしたことにより、A児の学びが深まったと言える。さらには、「今後どのような場面で役に立つか」を問うことで、A児はこの単元の学習を自分の今後の生き方にも反映させて、未来の自分について考えることができるようになった。これらのことから、本単元で「未来の自分を思い描いて夢の時間割をつくる」というゴールを設定したことは、目的意識をもたせるために有効であったことに加え、子どもが未来の自分の生き方を考えることにもつながったことがわかる。本実践により、ゴールの設定が子どもの「未来へ生かす決める」を実現することに影響があることがわかった。

#### ②5年「When is your special day?」の実践

本単元は、We Can! Unit 2 When is your birthday? を参考に単元を構成した。誕生日や行事をトピックとし、月日の言い方に慣れ親しむ単元である。本実践では、誕生日について言ったり聞いたりすることをきっかけに、子ども一人一人がもつ「大切な日 My special day」について友達と伝え合った。誕生日は子どもにとって大切な日の一つである。しかし、誕生日以外にも子どもの心に残る大切な日があるのではないかと考えた。そして、自分にとって本当に大切な日はいつなのかを考え、友達と伝え合うことでお互いのことを深く理解してほしいと願い、本単元を設定した。本単元のゴールは「自分の大切な日 My special day やその日にしたいことを友達に伝えよう」である。大切な日の理由を表す際には過去時制を用いるのが自然であるが、学習段階や単元のねらいを考慮し、既習表現である I want to ~. を使って自分の思いを表現できるように配慮した。

本単元では、未来へ生かす決める授業をめざすために、主に三つの手だてを講じた。一つ目は「まず言ってみる」という活動である。はじめにゴールを示した後、単元計画を立てる前に「自分の大切な日と何がしたいかを言ってみよう。」と子どもに投げかけた。まず言ってみることで、自分には何ができて、何ができないか、今の自分の状況を振り返り、学ばなければならないことを認識することができる。二つ目は教師の話す英語を聞く活動である。自分の大切な日を考える学習では、教師の大切な日や、テキストに載っている Kazu の special day についてのエピソードを英語で聞かせることで、子どもが考える視点を広げ、自分の大切な日についてより深く考えることができるようにした。三つ目は省察において、今後の展望をもてるような項目を設定したことである。省察では、どのような力を身に付けたか、今後どのような場面に役立つかに加え、2学期以降の学習内容を子どもに示し、それらの学習で何を学びたいか、どのような力を付けたいかをたずねた。

1 時間目の授業では、Teacher talk で子どもに親しまれているキャラクターの誕生日を取り上げた。さらに、ALT との対話で大切な日はいつかをたずね合い、special day の意味を

教師：じゃあ、自分の大切な日とその日にしたいことを  
言ってみよう。

B 児：December 25th. See Santa.

C 児：July 11th. プレゼントほしいし、ゲームしたい。

教師：みんな大切な日があるんだね。でも、何か困っている  
人いない？

D 児：大切な日が見つからないから、日付が言えないし、  
何をしたいかも言えない。

教師：そうか。大切な日が見つからない人もいるんだね。じゃあ  
これからどんなことを学習していけばいいかな？

子どもと共有した。その上でゴールを示し、「じゃあ、言ってみよう。」と子どもに言わせてみた（資料 3）。B 児は知っている単語を使いながら、大切な日としたいことを英語で言うことができた。C 児のように日付は言えても、したいことを英語で言えない子どもが多かった中、D 児は大切な日が見つからず、悩んでいた。D 児が困っていることを取り上げることで、「大切な日がいつかを考えないといけないよ」「したいことを英語で言えるようにしたい」などと、これから学ばなければなら

資料 3 学習計画を決める前のやり取り

ならないことが明確になり、学習計画を立てることができた。

2 時間目、大切な日はいつかを考えた。授業のはじめに大切な日をたずねると、多くの子どもが誕生日、クリスマス、お正月を挙げていた。理由としては、「プレゼントがもらえるから」「お年玉がもらえるから」など、自分にとって利益のある日を選んでいく子どもが多かった。そこで、大切な日を考える視点を広げるために、教師やテキストに出てくる Kazu の大切な日のエピソードを英語で聞かせた（資料 4）。

(Noritomi) My special day is October 29th. It is *Hyakumangoku* day. I went to Okayama for our brass band competitions. We got a gold prize for the first time. I was very happy. I want to play the clarinet with my friends.

(Kazu) I'm Kazu. I'm eleven years old. My birthday is April 8th.

My special day is April 8th. We have a new student. She is Maria. She is our new friend.

資料 4 教師が聞かせた大切な日のエピソード

教師の大切な日の話に加え、テキストで学習した Kazu の話を聞かせることで、子どもは様々な視点から大切な日とはどのような日なのかを考えることができた。また、英語でエピソードを聞かせた後に、「乗富先生やカズはこのとき、どんな気持ちだったと思う？」とそのときの感情を想像させることで、どきどき、わくわくといった気持ちになった日を大切な日に選ぶとよいと子どもが理解することができた。さらに、大切な日のエピソードとして E 児の前時のふりかえりを活用した。E 児は前時のふりかえりの T（これからやってみたいこと）に、「私の大切な日はさよならデーです。悲しいことだからこそ大切にしたい」と書いていた。このふりかえりを紹介することで、わくわくなど楽しい感情だけではなく、悲しい寂しいといった感情でも大切な日になりえることを、子どもは学ぶことができた。

F 児は E 児のエピソードを受けて、自分の大切な日を「March 31st バイバイトヤマデー」とした。F 児は教師の話を書く前から、大切な日は March 31st としていたが、理由をたずねられると、「何となく。印象に残っているから。」と答えており、大切な日に選んだ理由として明確な思いをもっていなかった。教師の話や E 児のエピソードを聞いて、もう一度大切な日はいつかを考えたとき、F 児はやはり March 31st を挙げ、その理由として、「富山を離れる日で、とんでもなく悲しかったから」と書いていた。教師の話や E 児のエピソードをもとに考えたりしたこと、自分がこの日を大切な日に選んだ理由について自分の思いをより明確にもつことができたのだとわかった。

単元末に行った省察では、2 学期以降の学習内容を示し、どのような学習をしたいか、これからどのような力を付けたいかをたずねた。資料 5 は F 児の省察の記述である。教師の話や E 児のエピソードを聞いたりすることで、F 児は自分の中にある本当の大切な日

はいつなのか、そしてそれはなぜなのかを深く考えることができた。このことをきっかけに、F児は2学期からも「しっかり考える学習」をしたいと述べており、英語表現を身に付けるだけでなく、伝えたい内容についてしっかりと考える力を身に付けたいと考えていた。本単元の学習において自分の考えを深める経験をしたことにより、F児は伝えたい内容について深く考えることの大切さを学ぶことができた。このように、省察で今後どのような学習をしたいかを問うことで、子どもは1学期の学びを生かして、自分の未来をより具体的に見通すことができるとわかった。

4. 単元全体をふりかえって、新しくわかったこと、気づいたこと、深く考えたことは何ですか。

富山を学んだ日は、いつのまにか、  
自分の大切な日になっていくこと

6. 2学期には、「行ってみたい国や地域」「私のおこがれの人」「宝物はどこ？」などの学習があります。2学期にはどのような学習をしたいと思いますか。また、2学期からの英語の学習で、どのような力をつけていきたいですか。

どのような学習をしたいと思いますか

自分の意見についてしっかり考える学習

どのような力をつけたいか

それぞれの言いかたや単語力を、  
つけたい

資料5 F児の省察の記述

## 5 成果と課題

### (1) 学びへの原動力を形成する「決める」

実践①、②で述べたように、学習のねらいや子どもの実態に合わせて、学習のゴールを設定した。ゴールを設定したことで、子どもが相手意識・目的意識をもち、見通しをもって学習に取り組むことができた。また、トピックと関連させて子どもが自分の未来を思い描くことのできるゴールを設定することで、未来の自分を思い描き、それに向けて必要な学びを自ら決めることができた。加えて、ゴール提示のあとに「言ってみる」という活動を取り入れることで、今の自分の状態を把握し、学びの必要性を自覚できることもわかった。ただし、「言ってみる」という活動については実践が少ないため、どのような単元でも有用であるかは明らかではない。今後、単元のねらいや子どもの実態を見極めて明らかにしていきたい。

### (2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

子どもが伝えたい内容について、教師や友達の話聞くことで考える視点を広げる手だては、自分が本当に伝えたい内容であるかどうかを深く考えるために有効であった。また、子どもが内容について深く考えたことにより、省察において自分の変容に気付くことができた。単元のはじめにはできなかったことができるようになったこと、伝えたい内容がより深まったことなどを、子どもが自分自身で認識し、今後の学びに生かそうとする姿が見られた。また省察のワークシートには、「もっと英単語を知りたい」「英語で言えるようになりたい」と適切な英語表現を学びたいという子どもの思いが多く記述されていた。適切な表現を選択・活用することについては、モデルの提示の仕方や内容のたせ方、トピックなど、多くの課題を抱えていることから、今後も実践を積みながら適切な表現の指導の仕方について検討していきたい。

### (3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

毎時間の授業でふりかえりを行ったことにより、子どもがねらいに到達することができているかを見取ることができた。また、自由記述のTを継続的に書かせることで、子どもがゴールに対して今どの位置にいるのかを自覚し、この先の学習について見通しをもつことができていた。また、本実践では、自分自身に問いかける場面が多くあり、子どもはそれぞれ自分の心の中にある思いや自分の生き方について考えていた。省察で「身に付けた力」や「深く考えたこと」を問うことにより、子どもは自分を客観的にとらえ、自分自身について考える力が身に付いてきたことを認識していた。英語の学習を通して、英語を聞いたり話したりするスキルだけではなく、コミュニケーションを通して自分や友達のことを理解しようとする態度が育まれていることを感じている。